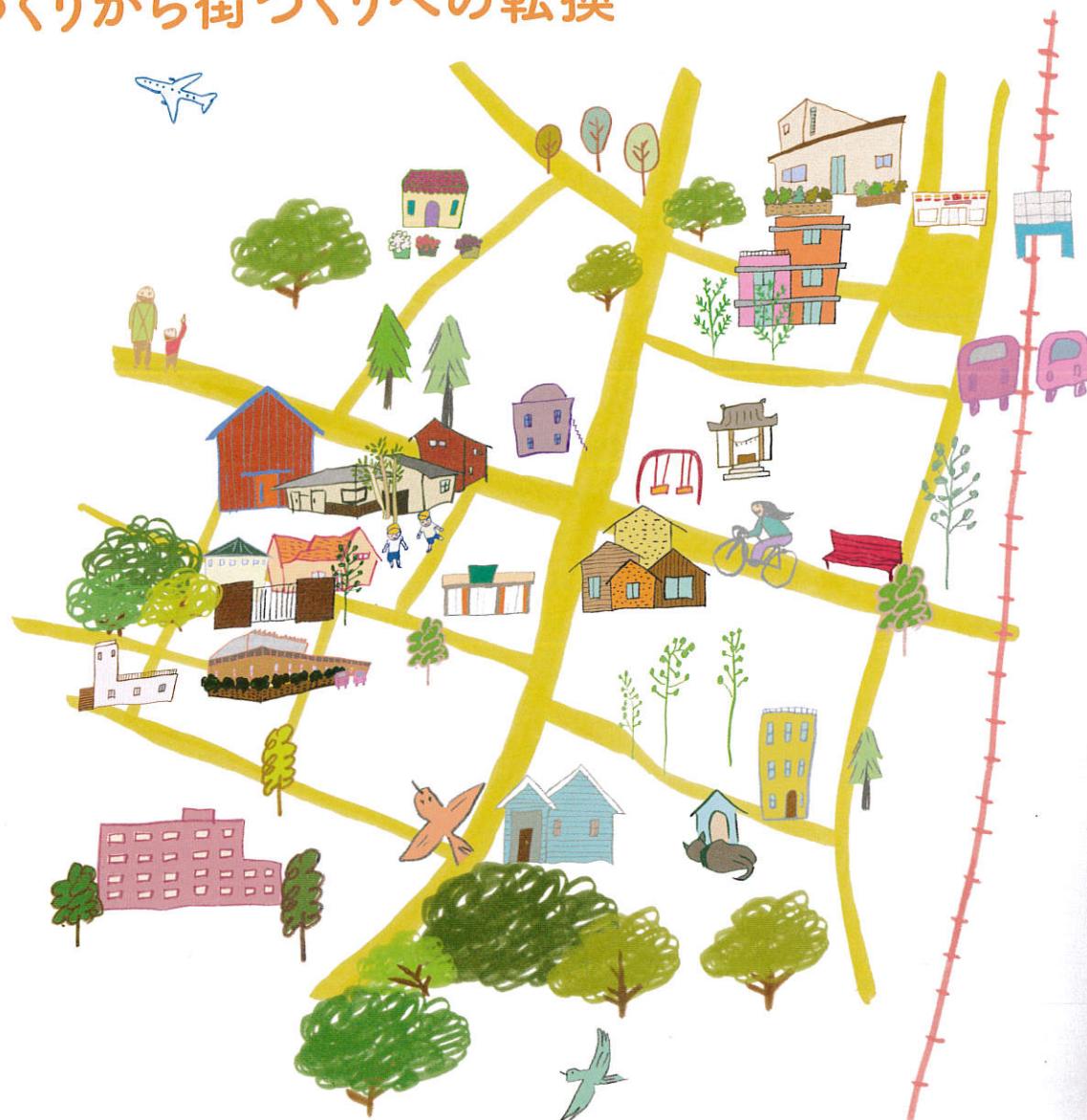


小さな園の子育て支援から、 多機能型地域子育て支援・地域協働へ 園づくりから街づくりへの転換



認定こども園2園と小規模保育施設2園・企業型保育施設・放課後児童クラブ・子育て支援センター・宿題カフェ・マタニティハウス・駄菓子屋・カフェ等が同一地域に存在します。子ども・子育て中心の街づくりを目指して運営しています。

子ども自身の豊かな育ちを支える地域 多機能型地域子育て支援、地域協働

わが国では、人口減少や少子高齢化が深刻な状況となっています。国の政策として、子育て家庭が身近な場所で適切な支援を受けられる体制を構築し、子育て家庭におけるさまざまなニーズに対応し、すべての子育て家庭が、それぞれが必要とする支援にアクセスでき、安心して子どもを生み育てられる環境を整備する方針を打ち出しました。

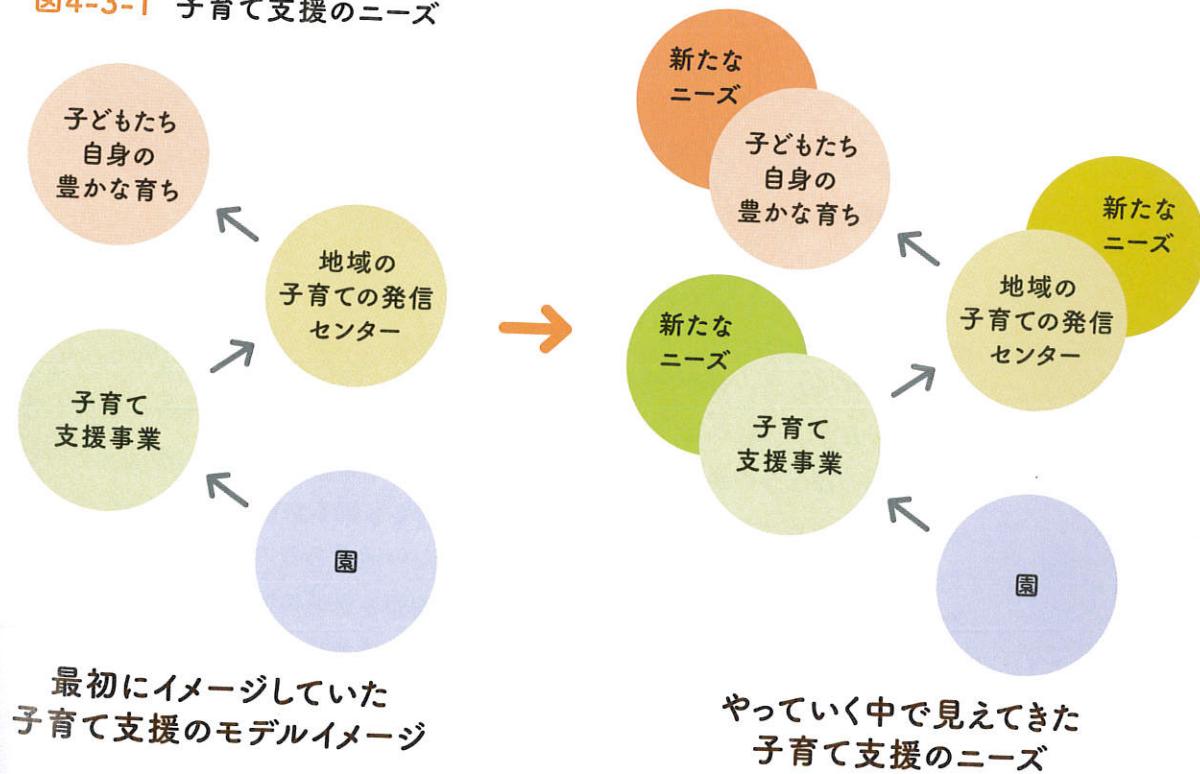
また、社会構造が大きく変化したこと、就労の有無だけでなく、多様な文化や社会性をもつ家庭も増え、さまざまな家庭生活をおくる子どもたちが1つの園に在籍します。自然災害や感染症等の影響により、子どもや家庭・園を取り巻く環境も日々変化しています。

このような背景の中、子どもたちが豊かに成長していくために、認定こども園や保育所、幼稚園には、地域の子育て支援や地域の関係機関との連携・協働などが強く求められ、従来の園のもつ機能や役割の変化を期待されています。

子育て支援を始めてみることで見えてきたこと

地域のセンター的機能として、地域の関係機関との連携・協働などを目指すべく、子育て支援事業を始めてみると、地域のさまざまなニーズに出会うことにな

図4-3-1 子育て支援のニーズ

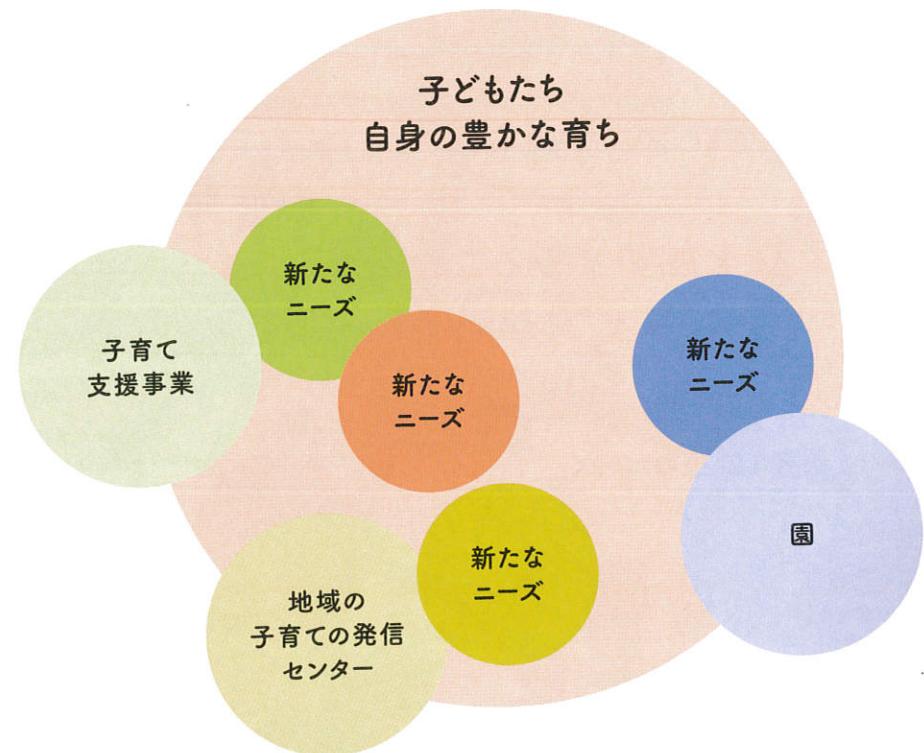


りました。まさに、始めてみてからニーズを知り、そして知らなかつた大きな壁に出会うことになるのです。

幼稚園における子育て支援を振り返ると、園を母体にした支援事業である子育て支援をやりたいのではなく、子ども自身の育ちを充実して豊かな育ちを保障することが目的だと気づきました。そして、その目的を達成するために多機能化を目指していくことになるのです。

子どもたち自身の豊かな育ちという目標を掲げて実行すると、想定外の課題に出会いました。目標を達成できるように最短ルートを進んでいったはずが、その課題により新たなニーズに気づくことで、その必要性に応じてさまざまな施設を

図4-3-2 子育て支援を追求する中での育ちを支えるための多機能化



拡充していました。

一つひとつのニーズに向かい合っていくことは、時に遠回りと思えるような失敗も起こります。しかし、今までの道のりがあったからこそ見えてきた失敗とともに、一つひとつの新たなニーズとどのように向き合い考えるかが大切だと思います。目標の達成には、1本の道だと思っていても何本かの道が存在します。しかも、それらの道にはどこに向かうかわからない道もあるのです。そうした絡み合った何本もの道を一步一歩進み、一つひとつのニーズに向かい合うプロセスに意味があり、ゴールに近づいていることに気づきます。

ゴールに近づく（目標の達成に向かう）上では、新たなニーズにどう向かい合うかが試されているかもしれません。

地域や行政と協働した子ども・子育て中心の街づくりを目指してのトライアル・アンド・エラー

地域や行政機関との協働・連携は、形だけ行うことは非常に簡単だと思います。しかし、協働・連携を何のために図るのか？と考え、形にしようと思うと、非常に困難なものだということに気づきました。計画し実行したとしても、地域が応えてくれないかもしれない、地域には不必要的なものかもしれない、行政は理解してくれないかもしれません。

園での預かり保育から子どもの育ちを支える場を考える

ここでは、本園が試行錯誤しながら地域や行政、関係機関とつながり、子どもが豊かに育つために協働して「子ども・子育て中心の街づくり」の目標に向かっている様子を描いていきたいと思います。

他職種や地域、行政との連携を考えながら試行錯誤して、課題に向かい合い（トライ）、壁にぶつかりながら（エラー）、新たなニーズ（トライアル・アンド・エラー）を探る繰り返しの連続でした。園の近隣の背景として、子育て環境が十分でない町に所在する私たちの取り組みは、就園前の子どもと保護者の居場所や支援の場がないことに気づいたことから始まります。既存の幼稚園の中で、園庭開放や未就園児クラス、子育てひろばでさまざまなイベントを開催したり、空き教室を利用した認可外保育施設もはじめました。年間利用の子どもだけでなく、一時預かり利用の子どもも積極的に預かる等、地域の0歳から2歳の親子のために多くの労力を費やしました。

また、幼稚園でありながら、12時間開所の長時間保育や年末年始、お盆休み以外は保育を行い、就労の有無にかかわらず利用できる施設として、保護者のニーズに応えていたのです。

さまざまな課題や困難を知ることで、「支援ニーズ」に追われ本質を見失う

しかし、幼稚園で行う地域子育て支援には大きな弊害がありました。限られた職員で行う長時間開所と多様な子育て支援により、保育者が徐々に疲弊してきたのです。

長時間保育に加えて、土日も含めた子育て支援の実施、保育の質向上のための研修、多様な子どもたちを受け入れていくための話し合い等、負担が増えすぎて、気づいた時には、多くの職員が離職し、実習生は来なくなり、新卒者の採用予定者は4月を待たずに研修期間で姿を消していました。中には、3年目の保育者に

主任を任せなくてはならない年もありました。保育の質の向上、多様な家庭への支援、地域の子育て支援等、子どもや保護者のためにと行っていましたが保育者の負担になり、園の根幹を揺るがす状況になっていたのです。

支援とは何か。働きやすい職場と地域子育て支援の充実、自治体とのつながりへ

保育者が辞めていく園が取り組む地域子育て支援の質が高いわけがありません。子ども・子育て中心の街づくりの実現なんて、夢のまた夢です。疲弊し、劣悪となった環境の職場の姿に気づき、どんなに地域や子どもたちのためと思っても、働く保育者が次々と退職し入れ替わるようでは、質の向上は図れない、地域とうまくつながれるわけがないと反省し、考え方を変えていきました。

地域の多様な家庭で育つ子どもたちが、家庭環境に変化があっても園を変えることがないように、地域で子育てをする家庭の居場所を作れるように、そして、保育者の労働環境を改善し、安定した保育・子育て支援が提供できるようにと、園が抱える課題を解決していくためのツールとして、認定こども園を選択しました。この選択が、地域や自治体とのつながりに大きな意味をもつことになります。

認定こども園になり、幼児教育と保育を提供する機能に加えて、地域における子育て支援が義務づけられ、幼保連携型認定こども園に移行した本園も、児童福祉施設としての法的位置づけの施設になりました。そのため、開所時間に対する職員配置が適正になり、労働環境も安定していきました。そして、福祉部の所管する地域子育て支援拠点事業をはじめとする事業を受託することができ、自治体との関係が深まることになりました。

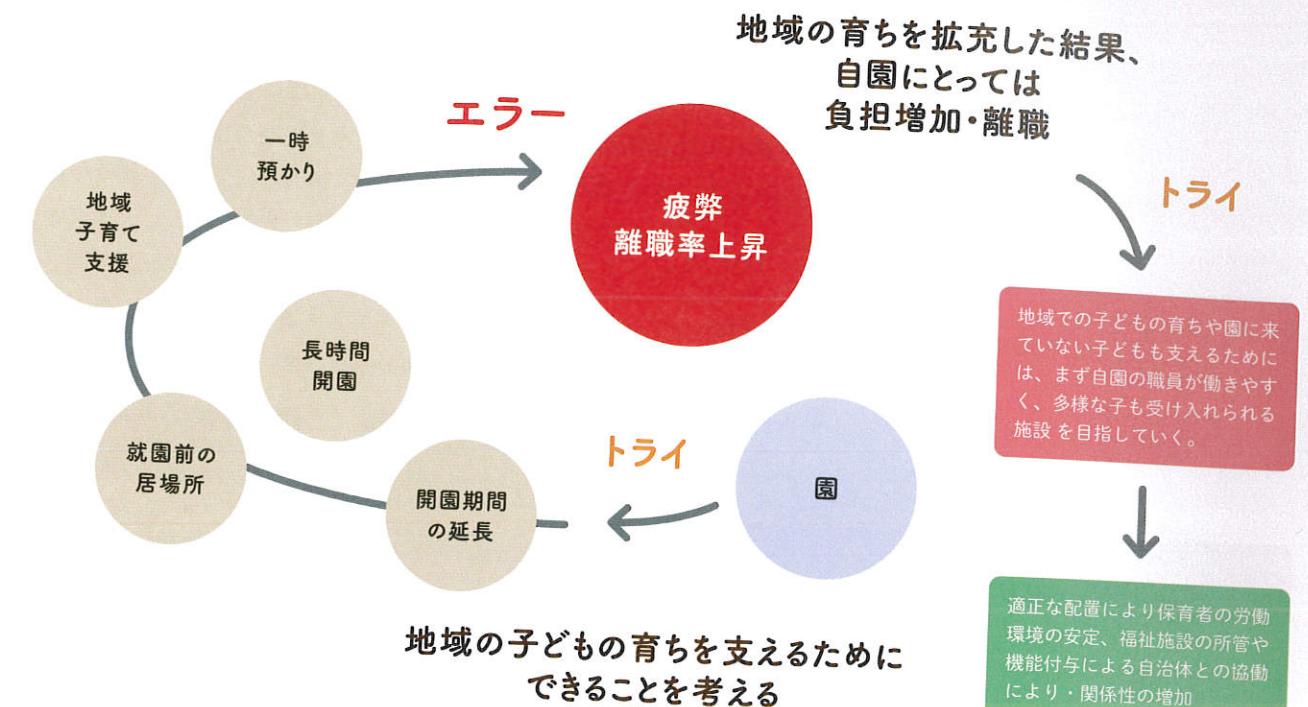
自治体との関係から平成27年度にスタートした新制度移行では、地域子育て13事業や地域型保育事業を積極的に受託するようになったのです。

所管が変わったからといって、すぐにうまくいくわけではありません。最初は行政との付き合い方がわからなかったので、監査指導等があると敵視していたこともありましたし、私学の独自性を勘違いして振る舞うこともあります。

しかし、給付費や補助金といった運営上のやりとりや、施設認可などの重要な局面を協働していくことで、行政の考えを知り、立場も理解してきたように感じます。そして、園の子どもたちを育てる重要なパートナーだと気づくようになりました。これは、園や地域、子育て支援においても重要なだと思います。一緒に目標に向かって協働していくために、つながりあうことから始めるべきではないでしょうか。

人口減少、少子高齢者社会において、持続可能な地域社会を形成するには、政治、行政、現場の三者がそれぞれの立場により職責を果たし、協働して社会のために尽力する必要があります。それは保育、子育ても同様だと思います。子どもや家庭を取り巻く様々な関係機関と連携をもち、各々がもつ資源を共有し、活

図4-3-3 働きやすい職場と子育て支援の充実に向けたトライアル・アンド・エラー



使い合う関係になれば、子どもや家庭にとって本当に豊かな地域になるのだと考えます。恥ずかしいことなのですが、今になると筆者はどこかで自分の園のために行政や地域があるように勘違いしてたように思います。地域の子ども達を育てるために、私達の園が認可され、運営させていただいているのだと気づいた時からは地域の子育てのために何ができるか真剣に考え、行動するようになったことは間違ひありません。

子どもたち自身の育ちを支える 地域との協働の試行錯誤

地域とつながる取り組みの一つとして、医療機関などとつながるための出張図書館があります。出張図書館といつても、病院の待合所等の本の管理を当園が行うといったものです。年に4回、本の入れ替えを行い、医療機関を利用する親子に本を届けます。

この事業により、医療機関とつながっていくと、園だけがなどをした際、時間外であっても丁寧に診療してくれる関係性が生まれました。現在では8つの医療機関と行政機関が当園の図書を利用しています。

また、県立高校との連携も深くなっています。学校の保育実習や保育体験を毎

年、数日引き受け、授業にも講師として職員が登壇します。園側にとっても、水害避難場所は高校の屋上となっており、避難訓練も行います。運動会も高校の校庭を利用していただき、行事の際に連携が図られています。高校生採用も行っており、希望があれば、働きながら養成校に通うこともでき、卒業後の就職先にもなっています。

このように、地域や社会のために何ができるのかを考えると、園に資源が眠っていることに気づきます。あとは、行動するのみです。

図3-3-4 こどもむらと地域のつながり



まずはつながってみようと チャレンジすることから始まる

最後に筆者の経験を述べさせていただくと、まずは誰かとつながってみることが一番の始まりだと思います。全国各地の教員・研究者、国や地方の行政、政治家、異業種の方々など、一つひとつのニーズを解決していくと、多くの人の出会いがあります。そこで出会いや学びが、園運営の財産となりました。運営はもちろん大切ですが、理事長、園長といった組織のリーダーとなる人間は、社会とのつながりを豊かにしなくてはならないのです。

社会の問題は、子どもたちの未来へとつながります。自園の保育だけしか見ていなかった時には、園の社会的役割には気がつきませんでした。私自身、団体活動は好まず避けてきたのですが、ある時、どうしても断れず役に就くことになります。しかし、あとになって考えると、そのときに一步踏み出していたからこそさまざまな人とのつながりが生まれ、自分自身が現在成長できたのだと思います。人を支える行動をすることで、最後は自分に返ってくる。私自身を成長させてくれたトライアル・アンド・エラーのサイクルです。

今最も大切にしていることは、どんなに支援を充実させても、支援を行うのは人なのです。保育現場では、保育者（園で保育するすべての関係者）である人が一番なのです。その保育者がどのような状態で働いているのか、生活しているのかが一番大切です。なぜなら、人は余裕がなければ、人にやさしくできないと考えるからです。

心身ともに余裕をもち、人のことを考えられなければ、どんなメニューがあっても機能するとは考えられません。たとえ機能しても、持続可能な形にはならないでしょう。一人ひとりの職場やかわっている人を大切にし、余裕があり、樂しみのある職場の中で、人間関係を形成することが最重要課題ととらえ、地域での協働や、子育て支援をしていく子どもの育ちを支える基本ととらえています。TE

